政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第16号
2003年7月

目次

書評
「身ぶり」としての思考
——矢野久美子著『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』
村井　洋 …… 1
研究動向
海外関連学会動向 …… 6
研究会記録 …… 7

2004年度研究会「自由論題」
報告者募集のお知らせ …… 10
理事会記録 …… 11
会務報告 …… 13

「身ぶり」としての思考

――矢野久美子著『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』（みすず書房、2002年）によせて

村　井　　洋（島根県立大学）

近年、アーレント研究の興隆は日本語文献においても著しいものがある。アーレントに主題を絞った書籍に限っても伊藤洋典『ハンナ・アレントと国民国家の世紀』（木鐸社刊2001年）、杉浦敏子『ハンナ・アーレント入門』（藤原書店刊2002年）をはじめとして注目すべき業績の枚挙にいとまがない。ここで取り上げる矢野氏の取り組みは、アーレントのバイオグラフィーとビブリオグラフィーとの結びつきを主題にした点で特色があると思われる。伝記的事実を重視したアーレント研究には、すでに寺島俊穂『生と思想の政治学』（芦書房刊1990年）という先駆的業績があるし、近年では太田哲男『ハンナ＝アーレント』（清水書院刊2001年）も刊行されている。そんな中にあって矢野氏は、「遂行的なもの」、「表層のもの」を手懸かりにアーレントの思考形成を問題とした。

本書は四章からなり、全編１６１頁である。長編とは必ずしも言えないし、独特の語り口の味わいもまた本書の特徴であることを考えると敢えて内容の要約をする意味も薄れてくるように感じられる。以下の要約は一読者のノートに留まる。

1

第１章は「亡命知識人アーレント」と名づけられている。既存のアーレント像を利用しながら、それらが意識しなかった問題点を指摘し、ユダヤ人であることへのアーレントの思考の襞をより詳細に描き出そうとしている。まず著者は『イェルサレムのアイヒマン』をとりあげる。この書がショアーの悪を過小評価しユダヤ人評議会を批判したとして否定的に受け止められてきたことはよく知られているが、アーレントとアメリカ・ユダヤ人社会との間にあった懸隔は何であったか、両者の事情を明らかにしながら問おうとするのである。

アーレントは１９４１年、アメリカに移住して間もなく、多様な移民グループの考察を行い、それらの比較考察を行う中でユダヤ人移民の特殊な性格について明らかにしようとした。一方、その後、ヨーロッパにおける虐殺の事実がアメリカに伝えられるとアメリカのユダヤ人たちは犠牲者に対して同一化する。この感情がユダヤ人「エスタブリッシュ」の強烈なアーレント非難の背景にあったのだとする。

著者はアーレントのアウトサイダー性をより詳細に検討するためにＪ．シュクラーの書評論文「パーリアとしてのハンナ・アーレント」を手がかりにする。シュクラーはラーヘル・ファルンハーゲンを描いたアーレントを「最後のドイツ系ユダヤ人女性」と見なした。ラーヘルはユダヤ人解放直後のドイツにおいてサロンを主催したユダヤ人女性で、いわゆる文芸的公共性の担い手の一人であったが、活動の場であったサロンが閉鎖された後は洗礼や結婚によってドイツ社会に同化しようとした。シュクラーはこの考察から、アーレントが「パーリア」と「成り上がり」の二つの概念を生涯保持し続けたことに注目した。アーレントはラーヘルの生涯に「成り上がり」と「パーリア」の二つの側面を見たのであり、前者を厳しく指弾し後者を評価していたのである。

シュクラーによれば、アーレントのユダヤ人意識には二つの特徴がある。上記のパーリア性の保持と、ユダヤ人問題を共同体の生活形態の問題ではなく、個人的な事実受容の意識の問題として捉える態度である。この二点がアメリカにおけるアーレントの思考と行動の特異性の基盤をなしたと捉えた。

たしかに、アーレント自身は一面で注意深くユダヤ人社会での行動を選び、ドイツ系ユダヤ人の

新聞に寄稿し、ユダヤ軍創設の主張の声を上げるなどしたが、他面精神的故郷をヘレニズムに仰ぐ「パーリア」性を堅持した。その結果『イェルサレムのアイヒマン』では東欧のユダヤ人社会の実状を同化概念で一括しながら、その反撥を予想すらできないほどユダヤ人社会から孤立していたのである。

シュクラールは、アーレントをラーヘルの系譜として再認した。そして、興隆するアメリカ・ユダヤ人社会をよそに、アーレントを最後にドイツ系ユダヤ人はアメリカから姿を消した、と断じたのである。

しかし、著者は以上のシュクラーの考察にアーレントを単にドイツ的教養を担った知識人としてしか捉えない一面性をみる。そこで次に著者は１９４３年に書かれたアーレントのエッセイ「われら亡命者たち」とそれに関して書かれたアンソニー・ハイルビュートによる論評を検討する。自分たちは自由に移住の道を選んでアメリカに来た」と思いたがる「われら」（実はユダヤ人亡命者）がいる。アーレントはこのような「われら」と「亡命者」とを区別した。これがハイルビュートがアーレントに読み込んだ二分法であった。亡命者であることを忘れたがる「われら」はユダヤ人であることを忘れたがる「成り上がり」と同様であり、したがってそれは「パーリア」から批判されることになる。著者はそれに半ば同意しつつも、それでは済まない場面を指摘する。それはアーレントが「生まれ故郷を喪失し」「仕事を失い」「私的関係を引き裂かれ」た「われわれ」について語る場面である。ここには前の二分法はそのまま適用できないであろう。著者は、ここでアーレントが「われら」から身を引き剥がし、「あいだ」を作り出してそこから「われら」に語りかけている、という精神構造を明るみに出す。「リアリティーは一枚岩の内部からではなく、『あいだ』をめがけた行為から生まれてくる」というのがアーレントの信念であった、というのである。

2

この「あいだ」をテーマとしているのが「『政治』と《あいだ》」と名づけられた第２章である。１９４３年、ヨーロッパのユダヤ人虐殺の情報がアメリカにもたらされた。アーレントは注意深くユダヤ人移送やナチのゲットー政策動向を見守っていたにもかかわらず、この出来事は「あらゆる意味や理解を拒絶する」ものであった。経験の断絶というこの事態は、すでにベンヤミンが第一次大戦の前線から帰還してきた兵士たちの沈黙に感じ取っていたものでもあった。ここには経験の伝達困難とならんで、人間の事柄を判断するに際しての伝統的価値の崩壊があらわれている。『全体主義の起原』を執筆するに当たって、アーレントが前提としていたのは以上のことである。第三帝国が死体製造装置と化していった出来事は、人間から複数性を奪い、自発性を抹消する、すなわち「人間の条件」とアーレントが呼ぶ事柄を破壊する行為であったといえる。しかし、アーレントは全体主義を描写するに際して、それらを必然性という相の下には捉えない。それは裁くという行為によって、人間に尊厳を取り戻させる行為なのである。

『全体主義の起原』最終章の「イデオロギーとテロル」において、アーレントは全体主義支配機構の本質をイデオロギーとテロルに見出している。イデオロギー的な思考は「世界を全体的に説明する」と自称することであり、経験を無視し論理的一貫性をもって事実を処理しようとする。また、テロルとは人々の「あいだ」の空間を徹底的に否定し、「世界」を喪失させる。人々を孤立化させ、人を必然的で論理的な思考へ追い込み、始める能力を奪ってしまう。こうした事態をアーレントは「フェアラッセンハイト」と名づけていた。

この事態とアーレントの活動概念の繋がりに留意しながらも著者は、もうひとつのコンテクストへと論点を移す。それは人と人との「あいだ」に政治はある、というアーレントの主張である。

これに関連して著者は、アーレントの思索日記とヤスパース宛の書簡に共通して現れる議論を拾い出す。それは、単数としての人間の全能が複数性をとる人々を余計者にしたのではないか、そして哲学が人間を複数の存在として把握してこなか

ったため、政治とは何かという問いに適切に答えてこなかったというアーレントの把握である。この理解からすれば、「人間はポリス的動物」という規定は必ずしも十分ではなく、「あいだの空間を作り出しうる」ことこそが決定的なのである。そうであれば、そのとき、相手以上の力を持たないという対等性（平等とは区別される）が共和制の基本的経験として重要な意味を持つのである。対等とはポリスの属性であり、それは人間の本能に内在するものではなく、努力によって作り上げられたものである。

こうして著者は、「あいだ」にアーレントの政治的なるものの発生源を見るのであるが、その相の下に照らしたとき「政治の意味は自由である」というアーレントの言述はどう理解すべきか。著者は「それは、ひとが単数の『人間』としての自分自身の外に出ることができるということであり、『複数性』を『共有』するということであり、さらには他者との交わりのなかで自分のかけがえのない『交換不可能性』を獲得できるということである」と捉えるのである。

3

第３章「アイヒマン論争と《始まり》」はアイヒマン論争で沈黙を守ろうとしたアーレントがわずかに対話を行った、Ｇショーレムとの間の応答を検討し、アーレントにおける政治的なものの始まりを跡づけようとしている。古くからの友人であったユーリー・ブラウンというユダヤ人の老婦人に、『イェルサレムのアイヒマン』を夏の別荘生活で執筆したことを隠そうとしていたという逸話から始まるこの章は、個人的なかかわりにおいて誤解を恐れ気遣う一方で、ユダヤ人のあり方についての思考を契機として政治的なものの特徴を明晰に打ち出したアーレントの姿を明らかにする。著者によればもとより、ヘブライ語を修得し青年シオニズム運動のリーダを経てカバラ研究に打ち込んだショーレムと３０年代のドイツの状況に直面してはじめて政治的にユダヤ人であることを自覚したアーレントとは対蹠的な組み合わせである。二人はW．ベンヤミンを介して知り合い、ベンヤミンの非業の死もアーレントからショーレムの耳に入れることになった。

この二人のやりとりはショーレムのアーレントに向けた「あなたにはユダヤ人の愛が感じられない」という言葉をもって決裂する。アーレントにとって愛は個人に向けられるべきものであり、ユダヤ人という集団との関わりをあらわすためには不適切である。愛は時に言葉による表現を省略しても可能なコミュニケーションの親密性と一体性に生まれるものである。ユダヤ人としての関わりはアーレントにとってむしろ政治的に語られるべきであり、それは言葉によって自己と世界との関係を明らかにする行為に他ならない。

ここで著者は「論争」全体を性格づけるいくつかの議論を紹介している。アーレントにはユダヤ人という不変の集合的アイデンティティが政治空間を閉鎖的なものにしかねないという危惧があった、とするボニー・ホニッグの主張、アーレントは公的態度と私的態度とを区別した上で公的すなわち政治的な観点から批判的な態度をとったのであり、アーレント批判者の多くはその区別を無視して絶対的道徳的な観点からの評価であると受け取ってしまった、というシラーズ・ドッサの把握、アーレントには生き残ったユダヤ人社会が犠牲者達の記憶をどのように語るかという主体と語り方における反省意識が働いている、とのセイラ・ベンハビブの指摘がそれである。著者はこれらの論点提起のすべてを吸収し、行論の中に生かしているが、わけても、ベンハビブの指摘を著者独自の着眼から展開していく。

すなわち、『革命について』でアーレントが指摘したように、「貧しい人々」への同情という心情的契機が「アルキメデスの支点」として政治的正当化を独占した結果テロルをもたらしたのと同様、ユダヤ人犠牲者への心情が政治に持ち込まれるとき、「均質的で自己内省的な暴力を生みだしてしまう」のである。著者はしたがって『イェルサレムのアイヒマン』は『革命について』と「同じ問題系に属して」いると見る。

著者はさらに従来見過ごされていたユダヤ神秘主義に対するアーレントの態度の意味を考察の正

面に据える。ショーレムは『ユダヤ教神秘主義の主潮流』を出版したが、従来の解釈ではアーレントは、ショーレムが解明したサバタイ派ユダヤ神秘主義の活動的側面を評価していると見なされてきた。著者はそれは誤解であると言う。アーレントは、ユダヤ教神秘主義は民衆に「運命を変えることの断念」と「理解することができない力に翻弄される無力な犠牲者」という自己理解を植え付けることになった、と見たのである。それにもとづいてアーレントは「最終的に自分の政治的運命を決定するのは人間なのであり、ショーレムがその破局的筋道をあきらかにした『目に見えない潮流』ではない」とコメントした。これに対してショーレムは反論し「運命がまだわれわれに用意しているかもしれない神秘的筋道」に注目するように促した、というのである。じつはこの数行に、アーレントの政治的なものの思考の端緒に連なっている思考の核心が込められていたという見解を示す。

以上のように本章はアーレントの政治的なものへの思考が全体主義の考察のみならずユダヤ人主流への批判をも端緒の契機とするという著者の考察を述べたものであった。アーレントは受難の特権化を拒否し、かつて自らのあり方を特徴づけていた「パーリア」と訣別した。そして、人間が世界との関係性を創設する政治的なものへの自らの道筋を辿ったのであった。

4

第４章「『木の葉』の《身ぶり》」はアーレントの思考生活を「身ぶり」として捉えることはできないかと問うた一章である。アーレント自身は思想を身ぶりとして捉えたことがあった。「実存哲学とは何か」の中でニーチェ自身を含めかれ以降の代表的思想家たちを英雄的な身ぶりの思想家達と特徴づけている。かれらは故郷喪失という人間の存在論的な位置から生じる不条理に対してそれに屈しない英雄的な姿勢をとった。ニーチェの「運命愛」、ハイデッガーの「決意性」そしてカミュの「反抗」はそのような身ぶりに他ならない。著者は、アーレントはこうした英雄的な身ぶりではない別の身ぶりに思考を託したのだと述べる。ニーチェ以下の企ては、存在の安らぎに身を委ねようとしたものであり、アーレントがそのために格闘した、あらわれとしての人間の複数性を捉えることができなかったという点で西洋の哲学の伝統に帰一するからである。

別な身ぶりへの身の委ね－それを著者はアーレント自身の述懐から始めている。メアリ・マッカシーに宛てた１９７１年の書簡のなかで語っているような、「風に揺れる木の葉のように自由である」という身の処し方である。これは単に夫のハインリヒに先立たれたゆえの感傷ではない。

著者はこの言葉の文脈を、ラーヘルの伝記を執筆していた時期に遡る。ラーヘルの伝記を書くことはその生き方を身ぶりとして捉えることに他ならなかった。すなわちアーレントがラーヘルの生を物語るとき行っていたのは、出来事への応答としてラーヘルの身ぶりを捉えることであった。それはちょうどＰ．リクールが『時間と物語』において示した、物語ることにおいて初めて形をとるようになる「自己性」に似ている。さらにそれはしばしばアーレントが言及するマキアヴェリのフォルトゥナとヴィルトゥとの応答関係に近い。つまり、表層の遂行性のみに根拠を持つものである。

すでに第二章で著者が確認しているように、自由とは行為の遂行と共に現れるものであり、政治に存在意味を与えるものであった。この政治的な意義を持つ自由が西洋の思想伝統では捉え損なわれていた。たとえば、政治的自由が興隆した古代ギリシアでは哲学の主題ではなかった。そればかりか内面性の問題として捉えられた自由が政治的な意義を与えられるとき、「主権」概念のように複数性を否定しかねない単質的なものを押し出してくるのである。

「風の中の木の葉」はもうひとつの意味を担っていた。やや意表をつく喩え方であるが、木の葉は木の枝々を重く担っているというのである。それはアーレントにとって全体主義の記憶であった。重さは事柄の重大さとともにそれが見せる以外にあり得なかったかの必然性の装いにもある。「木の葉」は全体主義という枝を断片として捉えるこ

とによって重さに耐える。すなわち歴史をプロセスとして捉える思考に対抗し、プロセスからこぼれ落ちた断片の意味を救済しようとする。ベンヤミンの『歴史の概念について』に表された歴史イメージがその助けになるであろう。

考察の最後を締めくくるのは、アーレントの読者にはなじみの深い「彼」と名づけられたカフカの寓話である。著者によれば過去と未来に挟まれて「彼」が戦っているシーンをアーレントは思考と世界の分離を表わす比喩と見なした。そして、過去と未来の間から抜け出るという「彼」の願望とは判断する位置に立つことを意味するという。判断することによって事実の厳しい継起に対し尊厳をもって応えることができるというのである。

若干の感想を加えて稿を閉じることにする。著者が本書でねらった目的、「アーレントの言葉のありか、『政治的思考』の現場を・・・跡づけること」（１０頁）は高い水準で達せられているように筆者には思える。アーレントの思考を「身ぶり」として捉え「思想」に還元しようとしなかった方法も説得力をもつ。入り組んだ思考の襞を簡潔なスタイルに乗せようとする戦略も読者を惹きつけるであろう。これらはアーカイヴの一次資料に多くを負った労力の裏付けをもつだけになおさらである。一点、加えるなら、著者が意識的な戦術としてとったこの簡潔な叙述スタイルに味わいを覚えるほどに、同時に細部にわたる傍証にも期待してしまうのである。たとえば、第４章においてハイデッガーやリクールの物語論に言及している箇所などは、問題の複雑さは想像に難くないものの、著者の見解をさらに聞きたかったと感じるのは筆者のみではないであろう。いずれにせよ、著者の試みがさらなる研究に向けられた期待に満ちた「始まり」であることは間違いがない。

海外関連学会動向

韓国政治思想学会機関誌目次

The Korean Review of Political Thought

Vol. 6 (Spring 2002)

Articles

- The Socratic Idea of Ethics as Opposed to Nussbaum's Reading / Park, Dong-Chun
- Conception of Public/Private in East Asia and Its Modern Variation / Lee, Seug-Hwan
- On the Necessity for the Integration of Rule of Virtue and Rule Law / Kang, Jung-In
- An Analysis of the Legalist Political Thought : Diagnosis, Political Vision and Prescriptions / Chung, Yoon-Jae
- The Sovereignty of Reason in Guizot and the French Political Culture / Hong, Tai-Young
- The Reconciliation between the Russian Community and Private Freedom / Kim, Eun-Sil
- Culture and Communicability : An Implication of Hannah Arndt's Theory of Judgment in the Discourse of Culture / Kim, Seon-Wook
- An Epistemic Critique of Rawls's Overlapping Consensus / Yang, Jin-Seok

Vol. 7 (Fall 2002)

Articles

- A Critique of Dasan's View of Modernity / Oh, Moon-Hwan
- 'Primitive *Great Unity*(大同)', 'Civilized *Great Unity*', 'Small *Tranquility*(小康)' and the Historical Evolution of Political Ideal : A Critical Interpretation of the "*Evolution of Li*(禮運)" Chapter in *The Book of Rites*(禮記) / Yang, Seung-Tae
- The Sublation of Confucian and Liberal Normative Theories : A Search for a Basic Guideline / Lee, Sang-Ik
- Ideal and Failure in Modern Chinese Anarchist Movement: Liu shi-pei as a Test Case / Cho, Kwang-Soo
- Thomas More on the Best State (Utopia) / Lee, Hwa-Yong
- Christcracy and the Christian State in Calvin: Searching for the Ideal State in Christianity / Park, Euik-Yung
- Karl Marx's Theory of Ideal Society: Utopian or Anti-Utopian? / Suh, Young-Jo
- A Confucian Perspective on Rawls's Conception of International Justice / Jang, Dong-Jin
- A Critical Review of Liberalism : A Post- Liberal Perspective / Hwang, Ju-Hong

研究会記録

政治思想研究会　Quo Vadis
慶応義塾大学法学部研究室内
連絡先　田上雅徳＜mtanoue@mb.infoweb.ne.jp＞

2002年度第1回（5月11日）
論　題　レヴィナスにおける他律という主体
　　――カント的二元論の解体――
報告者　冠木敦子（嘉悦大学）

第2回（7月13日）
論　題　イギリス理想主義における《公共善》の現代的意義――T・H・グリーンからE・バーカーへ――
報告者　宮崎文彦（東京工業大学大学院）

第3回（12月14日）
論　題　『哲学的註解』におけるピエール・ベールの「神」概念と「理性」概念
　　――迫害への応答として――
報告者　浅見恵（慶應義塾大学大学院）

第4回（2003年1月11日）
論　題　ハンナ・アレント解釈の傾向と注釈
報告者　森川輝一（名城大学）

第5回（4月12日）
論　題　西周の初期体制構想――近代日本における立憲思想の形成とオランダ法学――
報告者　大久保健晴（東京都立大学）

神戸大学政治理論研究会
神戸大学法学部研究助成室気付飯田文雄
連絡先　飯田＜fumoiida@rokkodai.kobe-u.ac.jp＞
日　時：2002年9月18日（水）
　　午前10時30分－12時30分
場　所：神戸大学法学部１６３教室
報告者：Adam Swift氏（Oxford University）
報告タイトル："Political Research at Oxford"

日　時：9月19日（木）午後3時－5時
場　所：神戸大学法学部大会議室
報告者：Adam Swift氏（Oxford University）
報告タイトル："Justice, Luck and the Family : Normative Aspects of Intergenerational Transmission of Economic Status"

成蹊大学思想史研究会
成蹊大学法学部亀嶋研究室
連絡先　亀嶋庸一＜kamejima@law.seikei.ac.jp＞

第106回
日　時：2002年6月22日（土）午後3時半
報告テーマ：ホッブズ・シュミット・如是閑
報告者：田中　浩氏
会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

第107回
日　時：7月27日（土）午後3時半
報告テーマ：ホッブス解釈の諸相
報告者：木花　章智氏
会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

第108回
日時：10月26日（土）午後3時半
報告テーマ：柴田平三郎著『中世の春』を読んで
報告者：矢吹　久氏
会　場：成蹊大学6号館3階第1大会議室

第109回
日　時：11月30日（土）午後3時半
報告テーマ：第1次世界大戦とルカーチ
報告者：西永　亮氏

会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

第110回
日　時：2003年1月25日（土）午後3時半
報告テーマ：フィヒテ知識学の読み方
— 瀬戸一夫『無根拠への挑戦』
(勁草書房、2001年)をめぐって —
報告者：杉田　孝夫氏
会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

第111回
日　時：3月15日（土）午後3時半
報告テーマ：ドイツ政治における主体性確立の試みとその挫折 — マックス・ヴェーバーの政治的言動の概観 —
報告者：今野　元氏
会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

次回予定
第112回
日　時：6月28日（土）午後3時半
報告テーマ：関谷昇著『近代社会契約説の原理』（東京大学出版会、2003年）を読む
報告者：大澤　麦氏
会　場：成蹊大学10号館2階大会議室

「思想史の会」
世話人　飯田泰三（法政大）和田守（大東文化大）
連絡先　神谷昌史＜kamiyam@tkg.att.ne.jp＞

第23回　2002年2月3日
報告者：萩原稔氏（同志社大学大学院）
論　題：北一輝と「アジア」—「純正社会主義」革命と「中国革命」の関係を中心に
報告者：中村勝己氏（中央大学大学院）
論　題：ピエロ・ゴベッティの自由主義革命の思想

第24回　4月29日
報告者：石津達也氏
論　題：横井小楠の大義について
報告者：李暁東氏（法政大学非常勤講師）
論　題：梁啓超における『法治』と『礼治』

第25回　9月5日
報告者：和田守氏（大東文化大学）
論　題：大正デモクラシーとアジアナショナリズム
報告者：栄沢幸二氏（専修大学）
論　題：近代日本の仏教家と戦争 — 共生の倫理との矛盾

第26回　10月27日
報告者：松井慎一郎氏（和光大学非常勤講師）
論　題：新渡戸・内村門下の国家官僚について
報告者：升味準之輔氏（東京都立大学名誉教授）
論　題：歴史への招待

第27回　2003年2月2日
報告者：大浜郁子氏（法政大学大学院）〔代読〕
論　題：「琉球教育」と植民地台湾の教育政策
— 小熊英二『＜日本人＞の境界』を視野に入れつつ
報告者：山根雄一郎氏（大東文化大学）
論　題：カント哲学の基本問題

第28回　3月7日
報告者：徐蕾氏（法政大学大学院）
論　題：吉野作造の政治思想 — 中日比較の視点から見るその〈民主主義〉精神の一形態
報告者：我部政男氏（山梨学院大学）
論　題：近代沖縄史の諸問題

早稲田政治思想研究会
早稲田大学現代政治経済研究所
連絡先　飯島昇蔵＜shiijima@waseda.jp＞
谷澤正嗣＜myazawa@waseda.jp＞

第169回2002年9月20日
報　告："Rawls and Communitarianism"
報告者：Adam Swift氏（Oxford University）
通　訳：山岡　龍一氏（放送大学）

第170回　10月19日

合評会：柴田寿子『スピノザの政治思想
　　ーデモクラシーのもうひとつの可能性』
　　（未来社、2000年）

報告1：「スピノザにおけるデモクラティアとヒストリア」

報告者：柴田　寿子氏（東京大学大学院教授）

報告2：「スピノザにおける政治権力の構成と社会契約論」

報告者：服部　美樹氏（早稲田大学現政研特別研究員）

第171回　レオ・シュトラウス政治哲学に関する連続講演会 ― 藤原保信先生の思い出に捧げる ―（2002年12月7日）

講　演

講　師：Nathan Tarcov氏（The University of Chicago）

演　題："The Problem of Tyranny, Machiavelli, and the Roots of Modernity in Leo Strauss's on Tyranny"

通　訳：飯島　昇藏氏（早稲田大学）

講　演

講　師：Heinrich Meier氏（Carl Friedrich von Siemens Stiftung）

演　題："The Theologico-Political Problem"

通　訳：千葉　　眞氏（国際基督教大学）

第172回　レオ・シュトラウス政治哲学に関する連続講演会 ― 藤原保信先生の思い出に捧げる ―（2003年3月15日）

講　演

講　師：Steven Smith氏（Yale University）

演　題："Strauss's Spinoza"

通　訳：飯島　昇藏氏（早稲田大学）

（注）すべての研究会について、早稲田大学現代政治経済研究所研究部会と共催。

今後の予定

レオ・シュトラウス政治哲学に関する連続講演会 ― 藤原保信先生の思い出に捧げる ―（2003年12月6日）

Robert Pippin氏（The University of Chicago）にシュトラウスとドイツ観念論との関連についての講演を交渉中

Michael Zuckert氏（Notre Dame University）にシュトラウスとmodernityとの関連についての講演を交渉中

Catherine Zuckert氏（Notre Dame University）にシュトラウスとpost-modernityとの関連についての講演を交渉中

第１１回政治思想学会研究会「自由論題」報告者募集のお知らせ

２００４年５月の政治思想学会において、特定のテーマを設定せずに、若手研究者に報告の機会を与える「自由論題」のセッションを設ける予定です。つきましては下記の要領で報告者を募集しますので、ふるってご応募下さい。

政治思想学会「自由論題」企画担当
柳父圜近（東北大学）

記

1．報告者は原則として学会員とする。応募者が多数の場合には、博士論文執筆前後の若手研究者を優先する。
2．応募に当っては、Ａ４の用紙一枚に、氏名、身分、報告の題目を記入し、報告内容のレジュメ（概要）を約２０００字（横書き）にまとめたもの３部を、２００３年９月８日迄に、下記の柳父まで提出すること。
3．企画担当は、レジュメをレフリーの審査にかけた上で、１０月の理事会で可否を決定し、その結果を応募者に通知する。レフリー役は、理事あるいは報告に関連するテーマに詳しい学会員に依頼する。
4．報告者に選ばれた者は、２００４年３月２６日迄に、当該セッションの関係者に報告原稿をそれぞれ一部送らねばならない。
5．報告時間は２０分～３０分を予定している。上記３の連絡の際にあわせて通知する。
6．内容によって、他のセッションに組み入れることがある。
7．報告者は報告当日用のレジュメないし報告原稿（いずれの場合も参考文献を付すこと）を１００部用意すること。
8．応募時のレジュメ、報告原稿および報告当日のレジュメ類は返還されない。
9．この件に関する問い合わせ先は下記のとおり。e-mailでの問い合わせが奨励される。

〒980-8576　仙台市青葉区川内 東北大学法学部
柳父圜近
TEL:022-217-6212　FAX:022-217-6250
e-mail : yagyu@law.tohoku.ac.jp

以上

理事会議事録

2002年度第4回

2003年5月24日 法政大学

出席者：飯島昇藏、飯田泰三、小野紀明、加藤節、亀嶋庸一、川崎修、菊池理夫、古賀敬太、権左武志、斉藤純一、鷲見誠一、関口正司、添谷育志、千葉眞、寺島俊穂、萩原能久、平石直昭、藤原孝、松本礼二、宮村治雄、柳父圀近、山田央子、吉岡知哉、米原謙、渡辺浩、和田守

（イ）2002年度決算案について

福田幹事よる別紙決算報告がなされ、ついで権左・山田両監事より会計報告がなされ、2002年度決算が承認された。

（ロ）2003年度予算案について

別紙2003年度予算案につき、代表理事及び福田幹事から説明があり、審議の結果、承認された。予算中の「海外報告者招聘費」は今回の研究会に韓国から招聘した金錫根氏の招聘のためのものである。また、学会の資産につき、2004年度以降、会員全体への合理的な還元の方途を積極的に探るべしとの問題提起がなされ、議論の結果、種々の方策の可能性を検討しつつも、さしあたり、次回研究会について、海外報告者招聘費に上限100万円程度の執行を念頭に、2004年度企画委員長と代表理事の間で海外からの報告者の人選を進め、10月の理事会で中間報告がなされることとなった。

（ハ）各種委員会報告

2003年度研究会企画委員長の飯田理事より、研究会が無事進行中であること、編集委員会主任の千葉理事より、『政治思想研究』第三号が予定通り出版・配布されたことが報告された。代表理事より、2004年度研究会の企画委員を平石（委員長）、柳父、添谷の三理事と杉田敦会員としたい旨諮られ、承認された。

（ニ）学術会議の件

代表理事より、第19期日本学術会議会員選出に関し、本学会から2名の推薦人を出した旨、報告があった。

（ホ）会費滞納者の件

福田幹事より、規約第五条及び昨年10月の理事会決定に基づき、昨年度末で会費を二年以上滞納した者55名を退会の扱いとした旨、報告があった。

（ヘ）2005年度研究会開催校の件

2005年度研究会開催校を日本大学としたい旨、代表理事より諮られ、承認された。

（ト）代表理事の選出方法の件

選出方法につき、可能であれば10月理事会で代表理事が具体的な案を提出し、決定できるよう努力したい旨、代表理事より諮られ、承認された。また、理事の選任方法につき、現行制度の評価を含めて検討する委員会の設置が代表理事より提案され、承認された。つづいて同委員会は小野理事・斉藤理事・加藤代表理事の3名で構成することが決定された。

（チ）新入会員の件

次の17名の入会が認められた。

伊丹謙太郎、藍弘岳、大竹弘二、梅田百合香、中島智朗、近藤和貴、高田宏史、太田哲男、花井かおり、山下雄一朗、浅見恵、尾原宏之、相原耕作、山辺春彦、住田孝太郎、桂木隆夫、小畑嘉丈

2003年度第1回

2003年5月25日 法政大学

出席者：飯島昇藏、飯田泰三、小野紀明、加藤節、亀嶋庸一、川崎修、菊池理夫、鷲見誠一、関口正

司、添谷育志、千葉眞、寺島俊穂、萩原能久、平石直昭、松本礼二、宮村治雄、柳父圀近、吉岡知哉、米原謙、渡辺浩、和田守

（イ）学会誌『政治思想研究』の件

編集主任の千葉理事より、米原（継続）、飯田、宮村、関口、川崎（以上４名新任、ただし飯田理事については2003年度企画委員と兼任）の各理事を『政治思想研究』第四号の編集委員としたい旨諮られ、承認された。また、学会事務センターへの委託により継続的な販売体制が確立されたことに伴い、全国の大学図書館への普及を図るべく、理事の協力を求めることとしたい旨、代表理事から要請があった。

（ロ）新入会員の件

次の12名の入会が認められた。

島田美和、田頭慎一郎、金子元、山本武秀、田中道人、村松晋、足立幸男、寺尾方孝、高増杰、北村治、三宅麻理、池田徳浩

会務報告

政治思想学会２００２年度会計報告書

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	3,361,104	研究会開催費	250,000
補助金（櫻田會）	1,000,000	通信費	363,320
会費	2,831,500	学会誌費	1,281,398
学会誌売上金	20,450	事務局費	79,568
研究会参加費	6,000	会報費	294,280
		予備費（業務委託）	538,068
		支出合計	2,806,634
		繰越金	4,412,420
	7,219,054		7,219,054
		資産内訳	
		センター預り金	884,162
		現金	8,258
		郵便貯金	140,000
		郵便振替口座	3,380,000

（単位：円）

政治思想学会２００３年度予算案

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	4,412,420	研究会開催費	250,000
補助金（櫻田會）	1,000,000	海外報告者招聘費	100,000
会費	2,150,000	業務委託費	500,000
学会誌売上金	30,000	通信費	420,000
研究会参加費	5,000	学会誌費	1,200,000
		事務局費	80,000
		会報費	300,000
		小計	2,850,000
		予備費	4,747,420
	7,597,420		7,597,420

（単位：円）

2003年7月7日発行　発行人　加藤　節　編集人　亀嶋　庸一
政治思想学会事務局　〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1　東京大学法学部　福田有広研究室内
Tel: 03-5841-3131　Fax: 03-5841-3174

会員業務（入会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送販売）
(財) 日本学会事務センター政治思想学会係　〒113-8622　東京都文京区本駒込5-16-9
Tel: 03-5814-5810　Fax: 03-5814-5825
学会ホームページ：http://www.soc.nii.ac.jp/jcspt/